

7. 春日市の自然環境の総括

福岡都市圏の中心に近い立地を占める春日市では、「自然環境（生態系）」は限定的で二次的なものであり、本来の構成より貧化したものとなっている。しかし、一部では春日神社等の自然性の高い樹林地や、オニバス、ツクシナルコなど地域性のある重要種、比較的自然性が高い河川（牛頸川）、シンボリックな大径木がみられ、保護すべき要件がみられる。

また、溜池周辺を中心とした、自然とのふれあいのための価値ある資源が残存しており、これらの特性を活かして住環境や子どもの育成環境の整備に取り入れることが望まれている。この要求は自然環境資源の限られた春日市ではより切実である。ただし、限られた自然であっても、アカトンボ類、カエル類、鳥類など普通種の生息環境など、不足環境を多少補うことによって、自然とのふれあいの場の質を格段に向上させ、地域の生態系の底辺を広げることができる。

（1）現存する重要な生物資源について

保護すべき重要な資源には以下のものが挙げられる。

①森林・樹林地、森林の動植物等

- ・照葉樹自然林（ミミズバイースダジイ群集）

九州では瀬戸内側を除く概ね 300m 以下の沿海地～低山に成立する。極相スダジイ林（原生林）の構成をとどめ、ミミズバイ、シロバイなど照葉樹の多様性が高い。本群集は九州北部ではほとんど残存していないこと、また、人為的に管理された社叢としてではあるが、シロバイやイチイガシなどの種がみられ、イチイガシ群落との共通種の存在など、学術的にも興味深い群落となっている。

最も典型的な樹林地として、春日神社社叢に自然性が高い群落がみられ、他の社叢林にも、下層は整理されたものが多いが、高木層に類似した構成種を持つものがある。これらについても調査を行うとともに、次世代木の育成などを検討する必要がある。春日神社社叢や、社池付近の二次林も構成種が類似し、観察に適する。

- ・大径木・保存樹木

市内には保存樹木として、18本が指定されている（平成23年時点）。

- ・アオバズク

春日神社社叢に渡来することが知られる。営巣は樹洞で行われ、大型のガなどの昆虫を捕食する。

- ・ナギ、エンジュ、オオバヤドリギ、センリョウなど地域のシンボルとなる樹木等

住吉神社のナギ林は「住吉神社のナギの杜」として県指定天然記念物となっている。生育本数が多く、平地に茂る様は独特の景観となり、この木を尊ぶ伝承の背景も加えて大変貴重なものといえる。エンジュは移入と考えられるが、歴史的、

シンボリック的価値が高く、春日小学校のものが市指定天然記念物となっている。オオバヤドリギは、関東南部以南～琉球、中国に分布するが、多いものではなく、希少性のある植物で、着生の奇観とともに観賞価値の高いものとなる。熊野神社境内のものが市指定の天然記念物となる（他の分布状況は不明）。センリョウは種自体としての重要性は一般に高くないが、春日神社では「春日神社のセンリョウ叢林」として県指定天然記念物となっており、保護が必要とされている。

②湿地、湿生植物

・ツクシナルコ

主として九州の平地湿地に稀にみられるもので、希少性が高い。広く分布する類似種アゼナルコとは果実によって区別できる。

平成 15 年度調査では、ツクシナルコは社池、大牟田池、白水池の 3 地点で確認されている。また、今回の調査では白水池、惣利池で確認している。

・抽水植物群落

春日市には溜池が多いが、浅い湿地となる環境は、堤防整備、改修、埋立て等で少なくなっており、保存および質の回復、地点の増加、機能の回復が望ましい。トンボ類、両生類の生息環境となるなど、他の動物の生息環境の確保の観点からも重要といえる。

・ヒクイナ

地域にはヒクイナの生息が知られるが、水田の減少、冬季の生息地となる溜池の埋立て等により、市内の生息地は危機的な状況とみられる。周辺地区にも生息することから、分散・移動時に必要となる小さな島状の湿地についても、価値を認め、保全を行うことが望ましい。

③河川

・牛頸川

河川中流の清流環境が残される。川幅と勾配はやや単調で、出水時の魚類の逃避場所となるよどみが生じにくい。礫底、砂底などの底質の多様性、早瀬と平瀬、浅い淵等の流れの変化、若干の蛇行も生じ、好ましい景観となっている。小学校等に隣接する部分があり、親水護岸や、一部河川沿いに植樹帯も設けられている。

・諸岡川

水量が少なく、出水による攪乱の少ない小河川である。白水大池公園北付近の本来の河川形態は適度な栄養が流れ込み、ゲンジボタル、カワセミなどが生息するような中流型であるが、現在は水田隣接部の一部を除き、住宅地の中を流れる 3 面張の水路となっている。毛勝児童センター付近では親水的な護岸工がなされ、カワセミも多く、ゲンジボタルの生息が可能となるかもしれない。

④溜池

比較的多様なトンボ相が残存することが平成 15 年度及び今回の調査で確認されているが、生息状況は必ずしも安定したものではなく、環境の修正が強く望まれる。

湿生植物では、平成 15 年度の聞き取り及び資料整理により、オニバス（社池・過去にあった）が挙げられている。オニバスの種子には休眠性があり、生存期間は非常に長い。各溜池の改修等に当たっては埋土種子の確認と活用が強く望まれる。

今回の調査地点では、抽水植物群落、矮生湿生植物群落などがわずかに残存するが、その面積は非常に小さく、特に抽水植物の茂る浅い立地や湿地が、開放水面の広さと比べて大幅に少ないことが確認された。これが水生生物、水鳥の生息の制限要因となっているとみられた。

写真 重要な資源の例



「春日神社のクスノキ」



アオバズク（資料写真）



牛頸川（河川中流域の清流）



溜池（社池）
現在は移入されたスイレンが茂る



左：大牟田池の抽水植物群落。広がり本地点が最大規模となり、ヒクイナ等の生息が困難。
 右：春日公園の調整池は市内では貴重な低湿地となり、生息環境としての修正が望まれる。



左：矮生湿生草本群落（アオガヤツリなど）。中央の緑の薄い部分のみ。白水池。
 富栄養化で水田雑草が増加、乾燥化なども加わると外来種であるメリケンムグラが繁茂する。
 右：熊野神社の「オオバヤドリギ」希少性もあり、寄生する様子は観賞価値が高い。



「住吉神社のナギの杜」特徴的な景観となる。
 「住吉神社のナギの杜」漁師の間で尊ばれるナギ。

(2) 自然観察に適する地点、特徴的な地区

①鳥類観察

春日公園は鳥類の観察に適する。特に日本庭園付近には、水場、林縁環境や、豊富で特徴的な樹種（ヤマガラが好むエゴノキなど）がみられ、鳥類相も多様であった。

また、河川環境では、カワセミ、サギ、セグロセキレイなど、シンボリックな種が多く、自然観察やふれあいの場として、質の良い資源であることが確認された。

②森林、社叢、大径木

地域的に特徴がある社叢がみられ、春日神社の社叢と巨木群のほか、熊野神社、白水八幡宮、住吉神社などは、成り立ちと着目点を整理すれば感銘を与える自然資源となり得るとみられた。自然観察のルートとして、植生的に興味深い「社叢と群落の観察地点」などにこれらをあてることができる。

③水生植物

ツクシナルコなど特徴的な植物を観察できる地点は少ない。抽水植物群落に比較的近づきやすいのは、大牟田池、満水時の白水池などであった。社池のオニバス（埋土種子）の春日公園への導入なども検討できるように思われた。また、ツクシナルコ、オニバスを多様性のシンボルとして、学校教育でも利用することができる。

春日公園の調整池はヒシ、キシユウスズメノヒエが茂り、現在はフェンス設置のため立ち入れないが、利用価値のある環境である。また生物の生息環境としての修正、整備も日本庭園の池を含めて望まれる。

溜池は全体的に平地辺縁部に位置し、ヨシ帯等の抽水植物群落が成立しやすい立地であるが、溜池の埋め立てが比較的浅い池を中心に進んだことなども関係し、浅い沼状の溜池、また明るい開放的な抽水植物群落が圧倒的に不足している。開放水面にカモ類は飛来するものの、植生帯を好むヒクイナ、バン等の水鳥が少なく、若干の環境の修正がなされることが、本来の生息環境を維持する観点から望まれている。

④昆虫観察

トンボ類は普通種でも多くなく、特に冬季にも湿潤な湿地環境の必要なアカネ類の繁殖場所が少なく、こうした立地の創出が望ましいとみられた。アカネ類が比較的多かったのは、春日公園日本庭園付近（田んぼビオトープと池部）、白水大池公園の右岸入江林縁付近などであった。

⑤魚類等観察

水生生物は子どもの狩猟本能や好奇心を満たす上で魅力的な対象である。牛頸川には、食味も良いオイカワが多産するほか、形態的に興味深いカマツカ、美しく観賞価値の高いヤマトシマドジョウ（清流性で一般の飼育は難しい）などが生息する。また、清流性のコオニヤンマなどのヤゴがみられ、重要な自然体験の資源となる。